

【資料】

アメリカの Augsburg 大学における 異文化看護プログラムの実際

Transcultural Nursing Program at Augsburg College in the United States

原 明子, 道重 文子

Akiko Hara, Fumiko Michishige

キーワード：異文化看護, アメリカ, 日本

Key Words: transcultural nursing, America, Japan

I. はじめに

法務省 (2016) はわが国における外国人登録者数について、2014年は約210万人と報告している。また、日本政府観光局 (2016) によると、訪日外国人数は年々増加しており、2015年には1,900万人を超え、前年比では47.1%の伸率である。2020年に東京で行われるオリンピックを控え、その数はさらに増えることが予測されている。それに伴い日本の医療機関を受診する外国人の数も必然的に増加すると考えられる。外国人患者受け入れの病院体制について調査した遠藤ら (2014) の報告書によると、「通訳を提供できる体制である」と答えたのは全体の35%、「外国人患者に配慮した院内案内図や案内表示を設備している」と答えたのは16%、「外国人患者が理解可能な言語で、医療説明書や同意書を作成している」と答えたのは16%で、以上3つすべてを満たす医療機関の割合は全体の4%であると述べられており、外国人受け入れの病院体制の整備に課題があると考察している。

また、商品や農産物などが中心に扱われてきた貿易に続き、現在では「サービス」も貿易対象と

なり世界的に拡大している。外務省 (2016) および経済産業省 (2016) によると、日本は多国間のサービス貿易自由化の取り組みである経済連携協定 (Economic Partnership Agreement; 以下、EPAとする) を締結し、「自然人の移動」を含めた、広範な経済活動全般にわたる分野を貿易対象としている。EPAは、特定の二国間または複数国間で域内の貿易・投資の自由化・円滑化を促進し、水際および国内の規制の撤廃や各種経済制度の調和等、幅広い経済関係の強化を目指すものであり、医療現場では看護師や介護福祉士も対象となり、日本へのインドネシアからの受け入れは2008年度、フィリピンからの受け入れは2009年度、さらにベトナムからの受け入れは2014年度から行っている。一方で日本の看護師国家試験合格はEPA看護師候補者にとって予想以上に難しく、また試験を受けるためや就労に必要とされる日本語習得、日本での生活における経済面、仕事の内容や看護制度の相違等に対する困難さに加え、日本人との交流、習慣や文化・気候を含めた環境への適応の困難さなど様々な思いを抱えている (長江他, 2013)。以上のことから日常的に

多国籍の人々へのヘルスケアが求められるだけでなく、一緒に働く者同士としての異文化理解を深めることが必要となり、課題であるともいえる。

Leininger (1991) によると、文化とは「ある特定の集団の思考や意思決定やパターン化された行為様式を支配する学習され共有され伝承された価値観、信念、規範、生活様式を意味する」と定義づけられている。さらに、文化を考慮したケアとは、「有意義で有益で満足感をもたらすようなヘルスケアまたは安寧のためのサービスを提供もしくは支持するために、個人、集団、組織の文化的価値観、信念、生活様式に合わせて行われる援助的かつ支持的で、能力を与えるような行為または意思決定を意味する。」と定義し、ケアとは看護の本質であると述べている (Leininger, 1991, 1997, 2002)。南 (2013) は、どのような国籍や民族、疾患の人であろうと、対象者や看護師が日本人同士であろうと、その人の文化的背景に着目することによって看護実践が変わると述べている。文化は分類の観点により無数に存在するだけでなく、一つの文化のなかにも階層・職能などによって様々な下位文化が重層的に存在していると指摘されているように (辻内他, 1999)、異文化理解は看護における対象理解の基盤となりうる。大野 (2007) が、看護師は自分とは文化的な背景が異なる対象のライフスタイルを理解し、生活を調整するような能力をもつ必要があると示しているように、看護教育にとって異文化看護を伝えることは意義深いと考える。

昨今、看護学教育において国際看護や異文化看護に関する教育が取り入れられるようになったのは、まず2007年に厚生労働省の「看護基礎教育の充実に関する検討会」の報告書のなかで、看護師教育に新設された統合分野の「看護の統合と実践」に関して「国際社会において、広い視野に基づき、看護師として諸外国との協力を考えることができること」が追加されたことが挙げられる。さらに、2011年に文部科学省の大学における看護系人材育成の在り方に関する検討会が開催され、学士課程における看護系人材養成として、「長い職業生活においてもあらゆる場で、あらゆる健康レベルの利用者のニーズ

に対応し、保健、医療、福祉等に貢献していくことのできる応用力のある国際性豊かな人材育成を目指す」と示したことも大きいだろう。わが国の看護基礎教育における国際看護教育の現状について調査した中越ら (2014) の報告によると、国際看護学や異文化看護学の授業を開講している大学の数は増加しており、そのなかには必修・選択科目を複数開講している大学もあり定着しつつあるが、教育理念や教育目標によってその扱い方が違うため、わが国の特徴を踏まえた教育内容を整備し内なる国際化に向けた国際看護教育プログラムの開発を検討していくことが課題であると述べている。

筆者はアメリカでも数少ない異文化看護のプログラムをもっている Augsburg College の Faculty Visitor として2016年4月より受け入れをしていただき、授業への聴講や会議に参加している。本稿では Augsburg College における異文化看護プログラムについて紹介し、日本の看護基礎教育における異文化看護教育プログラムを考える資料としたい。

II. Augsburg College の概要

1. Augsburg College および看護学部について

Augsburg College はアメリカ合衆国ミネソタ州のミネアポリスにメインキャンパスを置く私立大学であり、1869年にウイソコンシン州に開設され、その後1872年にミネアポリスに移設されている。最初のセメスターが開講されたのは1874年、1879年に最初の卒業生を輩出している。看護学部は学士号をもっていない看護職者を対象とした、The baccalaureate (BSN) completion program を提供しており、卒業後は学士号を取得できる。BSN completion program は1976年に最初の入学生を受け入れ、1978年にアメリカの大学看護教育委員会 (the Commission on Collegiate Nursing Education; 以下、CCNE とする) によって認定されている。1992年にはミネアポリスにあるセントラルルーテル教会 (Central Lutheran Church) に the Augsburg Central Nursing Center が開設され、精神疾患や貧困、依存症に苦しむホームレスの人々に対して無料で継続的な支援活動を行っている。支援内容は栄養

指導, 内服薬の処方, ストレス管理, 呼吸器および皮膚疾患の治療, 糖尿病や高血圧など慢性疾患の管理など幅広く行っている。現在はthe Augsburg Central Health Commons (ACHC) に名称が変更されている。以上のことからLutheran Churchとのつながりは深く, 看護学部精神の一部ともなっている。

大学院は修士課程 (Master of Arts in Nursing ; 以下, MAN課程とする) が1999年に開設され, 現在ではTransformational Nursing LeadershipとTranscultural Nursingとがある。MAN課程の使命は, ケアの現場を超えてとくに地域や世界における公平な健康の促進に重点を置き, 変革者となる指導者および異文化看護の実践者を養成することである。

DNP課程 (Doctor of Nursing Practice ; 以下, DNP課程とする) では, 2010年にTranscultural Nursing Leadership (TCN), 2014年にFamily Nurse Practitioner (FNP) 課程が開設されている。DNP-TCN課程の使命は地域や世界における健康格差をなくすことに重点を置き, ケアの現場やケアシステムを超えて人々の潜在能力を向上・維持させるとともに, 平和的な協働を通して健康を増進するために地域社会における異文化看護の指導者を養成することである。DNP-FNP課程の使命は健康格差をなくすことに重点を置き, 平和的な協働を通して人々の潜在能力を向上・維持し, 高度実践看護のリーダーおよび文化やケアの現場を超えて家族のプライマリケアを統合することができる看護職を養成することである。

MAN課程, DNP課程のいずれに入学するにしてもBSNの学位および正看護師としての臨床経験が必要となる。Rochester市内に分校があり, 必要に応じてMinneapolisとRochesterとで講義を展開できるe-learning方式が取り入れられているが, できるだけ対面方式での講義を行うように配慮されている。

全課程において, 入学する学生はMinneapolisまたはRochesterで看護師や保健師として勤務している者が多くを占め, 各課程によって入学理由は異なる。BSN課程では, 正看護師の資格があり学士号

をもっていない者を対象としており, 病院が学士号の取得を要求していることや, さらにキャリアデベロップメントとして管理職を目指す場合には修士等が必要なため, その一歩のために入学する学生が多い。MAN課程では管理職やさらにキャリアデベロップメントとして入学するケースが多い。DNP課程ではナースプラクティショナーの資格を取得するために入学している。

2. 看護学部のカリキュラムデザイン

Augsburg College (2016) は, 学識ある生徒, 思いやりのある責任者, 批判的に物事を捉えられる者, 責任あるリーダーを教育することを理念としている。看護学部もその理念を根本とし, 人々の健康を促進する考えに基づいて設立され, 奉仕教育, コミュニティに焦点を当てたリーダーシップの育成, 多様な環境と地球保護下において人々の可能性を最大限に引き出すことに焦点を当て, 統合された叡智を大切にしている。看護学部の各過程のプログラムは, 主にCCNEおよびアメリカ看護大学協会 (American Academy of College of Nursing; ACCN) の教育基準およびガイドラインに従って作成されている。

修士課程のコースの一例を表1に示す。修士課程は33単位で構成されており, 15単位の共通必修科目と選択するコースによって科目が分けられている。「Theory, Practice and Research Seminar」および「Graduate Field Project」は共通となっている。「Graduate Field Project」は論文の作成であり, 修了のための最終関門である。

実習では, 国内外において学びができるように大学のグローバル教育センターが中心となり, グアテマラ, ニカラグア, メキシコ, ナミビア, パインリッジ (サウスダコタ州), イングランドなどアメリカ国内, 海外と提携を結び一括して管理されている。さらに, ミネソタ州のハーモニーに住むアーミッシュやミネアポリスにあるthe Augsburg Central Health Commons (ACHC), 移民の人々を対象とした実習も行われている。アーミッシュとはキリスト教一派で, 電気・電話などを一切使用せず基本的に自給自足の生活をしている人々のことを指す。ま

表1 修士課程のコース

コース名	単位
Nursing Core Courses (15 semester credits)	
Transcultural Health Care	3
Transcultural Health Care : Practicum	1
Politics of Health	3
Politics of Health : Practicum	1
Theoretical Foundations for Advanced Nursing Practice	3
Theoretical Foundations for Advanced Nursing Practice : Practicum	1
Research Methods in Nursing	3
Transformational nursing Leadership Track (18 semester credits)	
Nursing Leadership in Complex Adaptive Systems	3
Nursing Leadership in Complex Adaptive Systems : Practicum	1
Transformational Nursing Leadership	3
Transformational Nursing Leadership : Practicum	1
Theory, Practice and Research Seminar	3
Theory, Practice and Research Seminar : Practicum	2
Graduate Field Project	3
Graduate Field Project : Practicum	2
Transcultural Nursing Across Care Settings Track (18 semester credits)	
Transcultural Healing Practices and Self Care	3
Transcultural Healing Practices and Self Care : Practicum	1
The Power of Ritual and Ceremony for Healing	3
The Power of Ritual and Ceremony for Healing : Practicum	1
Theory, Practice and Research Seminar	3
Theory, Practice and Research Seminar : Practicum	2
Graduate Field Project	3
Graduate Field Project : Practicum	2

た学生は大学が提供している場所だけでなく、自己の目標に応じて自由に実習を設定することができる。様々な状況下における人々との関わりを通して、異文化看護を学ぶ上で必要とされる知識だけでなく、異文化理解に必要な関わり方についてケアを通じて深めることができる。

Ⅲ. 看護理論の授業の実際

1. 看護理論の授業 (Theoretical Foundations for Advanced Nursing Practice) の概要

看護理論の授業は3単位の講義形式と1単位の実習から構成される。高度な看護実践の基盤としての看護学、看護理論に焦点を当てている。看護における異なる理論の哲学的基盤と研究、実践とを比較し、相互がどのように関連しているか理解し、多様なコミュニティにおける文化的で効果的なケアを提供す

ることに発展させることを目的としている。実習はミネソタ州にあるアーミッシュの人々が住む地域で行われるが、前述のとおり学生は自由に選択することができる。実習ではアーミッシュの人々との関わりを通して、異なる文化的背景をもった対象者の生活様式や信念、価値などの考え方などを理解し、相違点などを見出し、西洋医学との比較、アーミッシュの人々にとっての健康や看護を理解することを目的として行われている。

また、この講義が開講された2016年サマーセメスターの期間中は、6月にAugsburg Collegeと他大学の共同で開催された「Nobel Peace Prize Forum」への参加が推奨され、このフォーラムを通じて学生が経験してきた実践だけでなく、現代社会において取り組まれている多くの課題に触れることにより、広い角度から物事を捉えることが求められて

いた。さらに、Augsburg Collegeの使命でもある、地域や世界の健康格差をなくすことに重点を置いていることから、様々な問題に対して看護職がどのように活動することができるのか検討する機会となる。この講義は他の時期にも提供されており、開講される時期によって一部内容が変更になっていることもあるが、学生のほとんどがフルタイムで働いていることもあり、仕事やプライベートの状況により好きな時期に授業を選択できることは学生にとってメリットが大きい。テキストはChinn P. & Kramer M. (2015)の著である「Knowledge development in nursing: Theory and process. (9th Ed.)」, その他看護理論のテキストを使用する。さらに講義だけでなく、オンライン上における学生同士のディスカッションも行われるように組まれている。

学生に期待される結果として、①高度な看護実践のための概念的な基盤を形成するためにサイエンス, アート, 人文科学から公衆衛生の原則や知識とともに看護理論を統合する, ②看護実践にコミュニティ内にあるケアリングやヒーリングの多様なパターンを尊重し統合する, ③健康および健康な状態についての実践的な問題解決を立案・実施するために, 個人, グループ, コミュニティとともに変化を起こせるよう関係性を発展する, ということが挙げられている。講義の最終目標として, 様々な理論の分析, さらに, ヒーリング, ケアリング, 異文化のホリスティックケアを, 指導者としてどのように識別し定義していくか, という部分に重点が置かれている。

2. 授業の内容

最初に看護の歴史や学問体系について学び, 理解を深めることから始まる。どのように理論がつくられてきたのか, 看護学とはどのように定義されているのかを理解する。テキストを用いながら, 看護の知の構築について学生のプレゼンテーションを行いながらディスカッションを進めていく。理論家は, Florence Nightingale, Martha Rogers, Rosemarie Parse, Madeleine Leininger, Margaret Newman, Jean Watson, Betty Neuman, Myra Levine, Dorthea Orem, Sister Callista Roy, Nola Pender, Hildegard Peplauなどが紹介されており, 背景にある歴史や

文化を捉えながら理論の意味づけを行っていた。また, 理論と実践における経験とを結びつけながら問題解決方法を模索することなど, 常に多方面から物事を捉えることに焦点を当てながら考察している。ケアリング, ホリスティックケアにも重点を置いていることから, 看護理論とヒーリングを結び付けて考えることや, さらに詩, 俳句, アートなど作品として創造する課題もあったことは興味深い。ホリスティックな視点とともに看護理論を展開するなど「Master of Art in Nursing」の「Art」における考え方が深く刻まれている。講義の聴講を通して, 看護理論の理解は大前提であるが, 理論を用いた自己の課題や経験の分析, 問題解決方法を見出す方が積極的にディスカッションされている。また, 課題の一部では, 看護理論と異文化とを考察することもあり, 異文化理解を深める良い機会である。

IV. 考察

アメリカは多民族国家であるということから, 生活のなかや教育に社会, 人種, 異文化理解などが深く関わっている。とくにミネソタ州は移民も多く受け入れている州の一つであり, Augsburg Collegeだけでなく他大学においても, 異文化理解には積極的に取り組まれている。異文化理解とは, 自分の文化や価値観を一度取り除き, 相手の異なる文化や価値観を分析し, またそれを認めることである。Augsburg Collegeの理念や講義への参加を通して, 私たちは暗黙のうちに自分の物差しで物事を図り, 決めているところが多いことに気づかされた。授業を通して看護実践や現在の医療を考察することにより, 日本人同士の理解にも文化が深く関わっていることを振り返る良い機会でもあった。さらにお互いを知るためにコミュニケーションを深めたり, 自分の意見を主張する際には自己の文化を説明する必要がある。授業のなかでは「自分は誰であるのか」「どこから来たのか」ということを考えさせられ, 自分のルーツを知る際には非常に深く考えなければならない。しかし, 考えることによって自己を客観的に見つめ直し, 他者との違いに気づき, 受け入れる一歩とな

ることを学ぶことができました。

これまでの学びから日本の看護基礎教育における異文化看護教育についての展望を述べていきたい。

Kuwano, et al. (2015) は、外国人患者の看護経験を有する看護師にアンケート調査を行い、看護師の Intercultural Sensitivity が専門職としての自律性発揮の最も大きな影響要因であったと述べており、看護職に対しての文化の違いへの気づきを促す教育を大学・大学院・継続教育に取り入れていく必要があると示唆している。日本の異文化看護教育はアメリカやカナダと比較して、社会学、歴史・民族学的視点に関する能力獲得への意識が低いことを指摘し、日本は単一民族で単一言語を使用するという世界でも稀な国家であることが要因と推察している (中越他, 2014)。Augsburg College のクラスには、様々な背景をもつ学生がおり、学生同士のディスカッションのなかでそれぞれの違いを学ぶことができ、強みとなっている。しかし、国内外との比較だけでなく、国内であっても出身地や家族構成など育ってきた背景や世代間、性差の違いもまた文化の相違であることを鑑みてアセスメントすることが重要であり、看護師に求められているものと考ええる。大野 (2007) は、ヘルスケアシステムそのものや看護も文化の一つであり、看護師が職業的な文化を形成していることを意識し、医療者の常識を対象者に押し付けることのないように留意するべきであると述べており、状況を分析する際には、常に自分たちの文化がどのように形成されているのかという背景にも着目する必要がある。看護師は文化について学習し、文化感受性を育成するように努めるべきであると述べられているが (大野, 2007)、看護基礎教育からの継続的な意識づけが求められていると考える。看護師を対象とした長谷川ら (2002) のアンケート結果で、外国人患者をケアする際の不安の内容では言語が最も多く挙げられたと述べている一方、藤原 (2006) は、共通の言語だけがケアに重要ではないと指摘している。コミュニケーションの課題は、言語よりもコミュニケーションパターンの文化的差異、あるいはコミュニケーション成立への消極的な態度であると結論づけている。高文脈文化である日

本社会は、医療現場にも日本人独特の文化が深く根付いていることはいうまでもない。藤原 (2006) が、コミュニケーションの本質を学ぶ機会をもつことも必要であると述べているが、看護にとって必須のスキルであるコミュニケーションの方法について学ぶ際には、異文化との比較もしながらコミュニケーションスキルを高めていくことも必要になると考える。

実践の場において豊岡 (2015) は、患者の文化社会的背景からくる要因に気を配ることが文化間看護の重要な要素の一つであり、実践現場の状況や経験を言語化し、これを蓄積し、分析・考察していくこと、これを看護師に促すことが文化間看護教育の第一歩であり、今後の理論化にもつながるものと考察している。臨床の現場で看護者自身が自分自身の文化を見つめ直し自己を知ることが、また相手の文化の違いに気づき、看護ケアの方法を変えるきっかけにつながるのだろう。

日本における国際看護学に関わる研究動向を調査した平岡ら (2002) は、「保健医療協力」の文献は多い一方、他のトピックスが少ないことを指摘し、「ヘルスシステム」「異文化看護」「精神保健」の分野においても研究蓄積が必要であると述べており、看護基礎教育や実践の場に還元するためにも今後の研究成果が期待される分野であるといえる。

利益相反

本稿における利益相反は存在しない。

謝辞

Faculty Visitorとして受け入れていただいた Augsburg College の教員の皆様と、日々サポートしていただいている Augsburg College の元非常勤講師 Ms. Sandy Leinonen に深く感謝申し上げます。

文献

- Augsburg College : (<http://www.augsburg.edu/about/mis-sion/>) (2016.11.25)
- Douglas MK, Rosenkoetter M, Pacquiao DF, et al. (2014) : Guidelines for Implementing Culturally Competent Nurs-

- ing Care, *Journal of Transcultural Nursing*, 25 (2), 109-121.
- 遠藤弘良 (研究代表者) (2014) : 厚生労働科学研究費補助金 地域医療基盤開発推進研究事業 国際医療交流 (外国人患者の受入れ) に関する研究, 平成25年度 総括・分担研究報告書.
- 藤原ゆかり (2006) : 異文化圏からの人々の出産に対する助産ケアの現状—文化を考慮したケアの実現に向けて—, *日本助産学会誌*, 20(1), 48-59.
- 外務省 : 「サービス貿易の4態様」 (http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/wto/service/gats_5.html) (2016.9.30)
- Gustafson DL (2005) : Transcultural Nursing Theory from a Critical Cultural perspective, *Advances in Nursing Science*, 28(1), 2-16.
- 長谷川智子, 竹田千佐子, 月田佳寿美, 他 (2002) : 医療機関における在日外国人患者への看護の現状, *福井医科大学研究雑誌*, 3(1, 2), 49-55.
- 平岡敬子, 吉野純子 (2002) : 国際看護分野の文献量と研究動向の分析, *看護学統合研究*, 4(1), 3-7.
- 法務省 : 「国籍・地域別在留外国人数の推移」 (<http://www.moj.go.jp/content/001140153.pdf>) (2016.9.30)
- 経済産業省 : (http://www.meti.go.jp/policy/trade_policy/epa/tis/#index_area1) (2016.9.30)
- キシ・ケイコ・イマイ (2010) : 看護大学教育に影響を与える言語と文化 米国文化と我が国の看護教育, *佐久大学看護研究雑誌*, 2(1), 3-9.
- 厚生労働省 (2002) : 「看護基礎教育の充実に関する検討会」報告書.
- 久保宣子, 山野内靖子, 蛭田由美 (2016) : 文献から考察する看護基礎教育における国際看護学教育の現状, *八戸学院短期大学研究紀要*, 42, 69-79.
- Kuwano N, Fukuda H, Murashima S (2015) : Factors Affecting Professional Autonomy of Japanese Nurses Caring for Culturally and Linguistically Diverse Patients in a Hospital Setting in Japan, *Journal of Transcultural Nursing*, 27 (6), 567-573.
- Leininger M (1991) / 稲岡文昭監訳 (2012) : レイニンガー看護論 文化ケアの多様性と普遍性, 医学書院, 東京.
- Leininger M (1997) : Overview of the Theory of Culture Care with the Ethnonursing Research Method, *Journal of Transcultural Nursing*, 8 (2), 32-52.
- Leininger M (2002) : Culture Care Theory: A Major Contribution to Advance Transcultural Nursing Knowledge and Practices. *Journal of Transcultural Nursing*, 13 (3), 189-192.
- 南 裕子監修 (2013) : 国際看護学 グローバル・ナーシングに向けての展開, 中山書店, 東京.
- 文部科学省 (2011) : 「大学における看護系人材育成の在り方に関する検討会」報告書.
- 長江美代子, 岩瀬貴子, 古澤亜矢子, 他 (2013) : EPA インドネシア看護師候補者の日本の職場環境への適応に関する研究, *日本赤十字豊田看護大学紀要*, 8(1), 97-119.
- 中越利佳, 森久美子, 田中祐子, 他 (2014) : わが国の看護基礎教育における国際看護教育の現状と課題, *愛媛県立医療技術大学紀要*, 11(1), 9-13.
- Narayanasamy A (2003) : Transcultural nursing: how do nurses respond to cultural needs?, *British Journal of Nursing*, 12 (3), 185-194.
- 大野夏代 (2007) : 米国のテキストにおける「異文化看護」の記述内容の検討, *札幌市立大学研究論文集*, 1(1), 15-21.
- 政府観光局 : 「国籍別/目的別訪日外客数 (確定値)」 (http://www.jnto.go.jp/jpn/statistics/tourists_2015.np.pdf) (2016.9.30)
- 豊岡慎子 (2015) : 日本における外国人医療 I—文化間看護の現状と推進に向けて—, *日本大学大学院総合社会情報研究科紀要*, 16, 135-144.
- 辻内琢也, 河野友信 (1999) : 文化人類学と心身医学, *心身医学*, 39(8), 585-593.